はじめに

瀬戸内圏は古くから海上交通の要衝の地であり、日本文化の源ともいえます。香川大学は、こうした瀬戸内圏の中核都市として発展してきた四国の高松にあって、地域の「知の総合拠点」の形成を使命としています。本学では古くから、瀬戸内海の赤潮研究、ため池の研究、産業廃棄物対策、遠隔診断などの優れた地域に根ざした研究が続けられてきました。そこで、瀬戸内圏の諸課題を解決するべく調査研究を行うとともに、地域の財産である瀬戸内圏が育んできたその風土や豊かな環境を保全し、継承させ、発展させるために、「瀬戸内圏研究センター」が平成２１年３月１日に設立されました。当該センターは瀬戸内圏研究プロジェクト（海グループ：干潟を含めた浅海域の生態系研究、文化・観光・歴史グループ：瀬戸内圏の地域文化の発見と観光資源の創造、医療グループ：瀬戸内圏における地域連携パスと生涯健康カルテ(EHR)ネットワーク構想）の研究推進支援、行政や企業等との協議会および活動団体や地域住民等の意見からの新たな課題の発掘、それらを反映させるための施策の検討、セミナーやシンポジウム等による研究成果の公開、行政や企業等との受託研究や共同研究の推進、瀬戸内圏研究に関する情報の収集とデータベース化ならびにそれらの発信などを遂行し、地域への貢献を第一の目標に掲げて事業を展開しています。

本報告書では、研究開始から５－６年を経過した平成２４－２５年度までのセンターの成果と活動について報告致します。この間における海、文化・観光・歴史、医療の各グループの地域貢献に関係する主要な成果は以下のように整理できます。

海グループ：瀬戸内海におけるノリ色落ちの原因である栄養塩減少に関する基礎研究を実施すると共に、小豆島内海湾でノリ網への栄養添加技術の開発を実施、この技術を活用して香川ノリの生産安定に向けた調査研究を展開中です。一方、志度湾のカキ大量斃死原因究明調査を行い、貝リンガルを使用して環境の変化に対するカキの殻体開閉運動を計測し、酸素不足や有害赤潮生物などに対して異なる開閉応答が認められ、安心で安全なカキ養殖の生産の成立に向けて努力中です。

文化・観光・歴史グループ：これまでは瀬戸内海東部域の調査研究をしてきましたが、一部を残して西部域等の島嶼における事例調査を開始しました。丸亀市広島において調査と研究を行い、「離島の地域福祉と事業型 NPO Ⅰ・Ⅱ」の２編の論文を発表しています。平成２５年度の瀬戸内国際芸術祭の開催地の一つである観音寺市伊吹島での観光資源に関する調査を、新たなグループを加えて行い、シンポジュウムで報告しているたような成果を得ました。四国巡礼の世界遺産に向けての研究も展開しています。

医療グループ：地域活性化総合特区関連で、ドクターコムを活用した遠隔診療の実証に取り組むと共に、服薬指導体制の充実や看護師（オリーブナース）の教育などを行いました。次に、電子処方箋システムの開発と利活用を試み、大学病院、中核病院の基幹電子カルテの処方情報、検査情報、病名が、データセンターを経由して、調剤薬局のレセプトコンピ

ューターと双方向で情報交換できるようにしました。また、スマートフォンを用いた双方向の電子お薬手帳を開発しました。その他、香川県で開発した電子処方箋、地域連携クリティカル パスをはじめとするK-MIXの震災地域への展開や大規模災害に備えての超高速次世代ネットワーク「JGN-X」を用いた医療データの広域相互バックアップの実証などを行いました。

今後とも瀬戸内圏研究センターへの暖かい御支援をよろしくお願い致します。

瀬戸内圏研究センターゼネラルマネージャー
本城　凡夫